

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

令和 7 年 3 月 1 3 日

農林水産省

北海道（前回変動:令和6年）

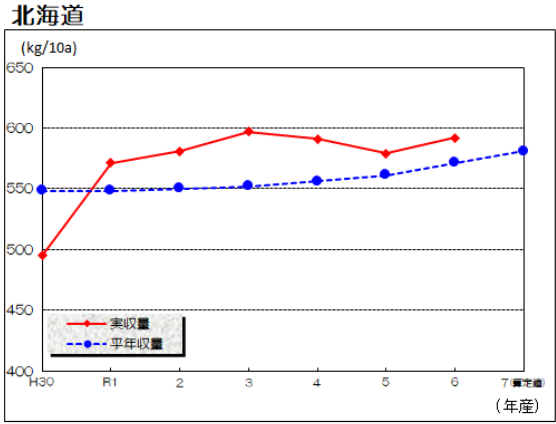
1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

算定結果は581kg（対前年差+10kg）となった。
これは、主な生産事情として、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

(1) 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
北海道における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）



北海道	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	495	571	581	597	591	579	592	
7中5平均	583 (12)							
平年収量	548	548	550	552	556	561	571	581
前年差	2	0	2	2	4	5	10	10

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向
品種構成の動向をみると、収量水準が高い「ななつぼし」中心の品種構成となっている。令和7年産も同様に推移するものと見込まれる。（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
ななつぼし	811	45.0	45.7	45.2	45.3	45.7
ゆめぴりか	584	20.9	23.4	23.1	24.9	26.0
ふっくりんこ	584	5.9	8.5	8.2	6.4	6.3
きらら397	819	10.0	9.1	9.4	7.0	4.1
えみまる	544	1.2	1.8	1.9	2.5	3.7
＊風の子もち	815	3.3	3.4	3.4	3.4	3.5
＊はくちょうもち	830	2.3	2.5	2.4	2.4	2.5
＊きたゆきもち	568	1.8	1.7	1.8	1.9	1.8
そらきりり	726					1.6
おぼろづき	800	2.1	2.0	1.8	2.0	1.5
きたくりん	584	1.9	2.1	1.7	1.6	1.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最良及び最悪を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 ＊印はもち米である。

表2 作柄地帯別作付面積割合の動向

作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準が高い「上川」、「北空知」中心に作付けされている。（表2）

地域（地帯）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
石狩	582	7.1	7.0	6.9	6.9	7.0
南空知	569	17.7	16.6	15.4	15.2	15.5
北空知	605	26.0	26.5	26.9	27.0	27.0
上川	611	28.3	28.9	29.5	29.4	29.3
留萌	559	4.0	4.1	4.2	4.2	4.0
渡島・檜山	519	6.8	6.7	6.9	6.9	6.9
後志	544	4.5	4.5	4.5	4.6	4.6
胆振・日高	527	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8
オホーツク・十勝	558	1.0	1.0	1.0	1.0	0.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最良及び最悪を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.1ポイント増加し、千もみ当たり収量が3.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は4.4ポイント増加している。

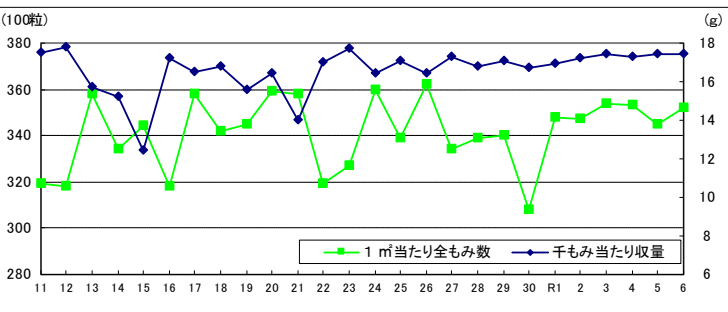
これは、今と昔の気温の平年値を比較すると穎花分化から減数分裂期の気温が高めで推移し、冷害リスクが低減したことと、登熟初期の気温が高温になりすぎずに推移し登熟が進んだことによるものと考えられる。（表3、4、図2）

表3 収量構成要素

	H20～H26年平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	22.4	21.9	21.8	21.8	21.9	21.5	△0.4	21.9	97.8	△2.2
1㎡当たり有効穂数（本）	562	538	574	540	561	564	3.0	555	98.8	△1.2
1穂当たりもみ数（粒）	61.7	64.5	61.7	65.4	61.5	62.4	0.9	62.3	101.0	1.0
1㎡当たり全もみ数（百粒）	349	347	354	353	345	352	7.0	349	100.1	0.1
千もみ当たり収量（g）	16.7	17.2	17.4	17.3	17.4	17.4	0.0	17.2	103.0	3.0
玄米千粒重（g）	21.8	21.9	21.8	22.2	21.8	21.9	0.1	21.8	100.0	0.0
10a当たり玄米重（kg）	576	598	616	609	599	611	12.0	601	104.4	4.4

資料：作物統計
 注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	※	－	90
R1	○	－	104
2	○	○	106
3	○	○	108
4	○	○	106
5	○	○	104
6	○	－	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
 －：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
 ※：不良（少ない）

青 森（前回変動:令和6年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

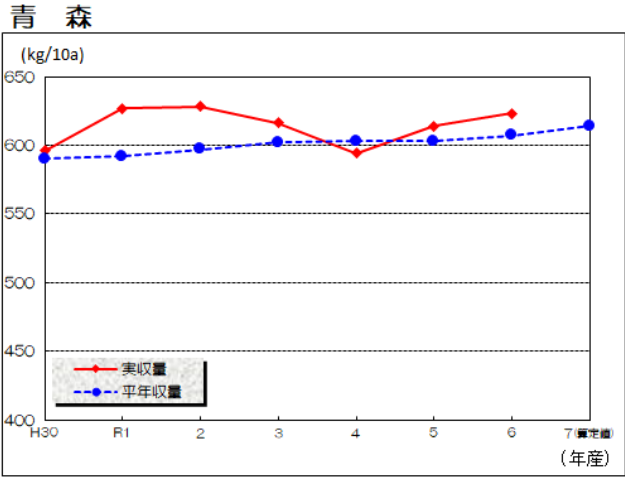
算定結果は614kg（対前年差＋7kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

青森県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）



青 森	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	596	627	628	616	594	614	623	
7中5平均	615 (8)							
平年収量	590	592	597	602	603	603	607	614
前年差	1	2	5	5	1	0	4	7

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「まっしぐら」、「つがるロマン」から、高温耐性品種で収量水準の高い「はれわたり」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。
（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
まっしぐら	621	75.5	78.6	80.7	79.2	71.0
					→ -8.2	
つがるロマン	583	17.3	13.6	11.8	7.0	0.0
					→ -7.0	
青天の霹靂	584	3.7	4.5	4.5	5.6	7.4
					→ +1.8	
はれわたり	636	0.0	0.0	0.0	4.8	19.0
					→ +14.2	

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和7年産も収量水準の高い津軽地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。
（表 2）

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
青森	603	11.5	11.0	11.4	11.4	11.9
津軽	635	60.8	61.9	62.5	61.9	61.3
南部・下北	575	27.7	27.1	26.2	26.6	26.9
単収試算値の対前年差(kg)		0.5				△ 0.1

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.1ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.8ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害は、算定期間中での発生はほぼ見られず、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

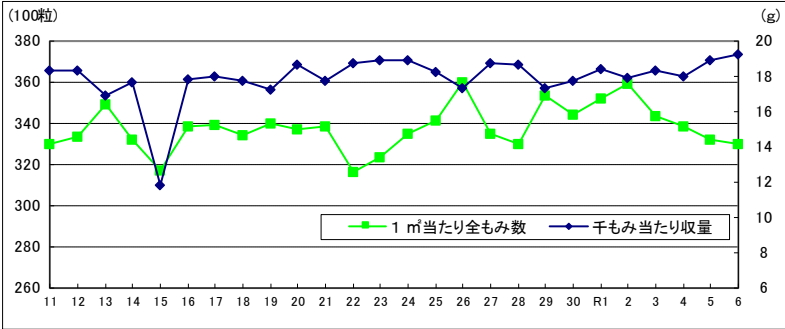
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	20.7	19.6	19.3	18.8	18.9	18.6	△0.3	19.2	92.8	△7.2
1㎡当たり有効穂数(本)	415	442	435	405	406	411	5.0	420	101.2	1.2
1穂当たりもみ数(粒)	80.9	81.2	78.9	83.5	81.8	80.3	△1.5	81.1	100.2	0.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	335	359	343	338	332	330	△2.0	342	102.1	2.1
千もみ当たり収量(g)	18.4	17.9	18.3	18.0	18.9	19.2	0.3	18.3	99.5	△0.5
玄米千粒重(g)	22.2	21.6	22.3	22.2	22.2	22.3	0.1	22.2	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	617	642	628	607	626	635	9.0	628	101.8	1.8

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び 千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
H30	○	×	101
R1	○	○	106
2	◎	—	105
3	—	—	102
4	×	—	99
5	×	○	102
6	×	◎	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

岩 手（前回変動:令和6年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

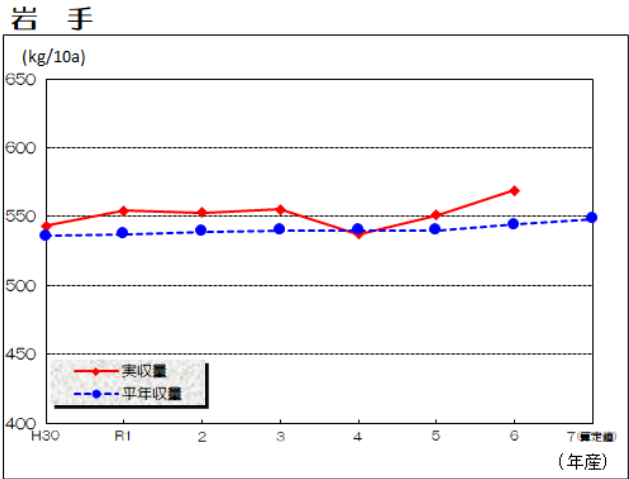
算定結果は548kg（対前年差＋4kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

岩手県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



岩 手	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	543	554	553	555	537	551	569	
	7中5平均	551 (7)						
平年収量	536	537	539	540	540	540	544	548
前年差	1	1	2	1	0	0	4	4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「銀河のしずく」が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R 2	3	4	5	6
ひとめぼれ	559	69.0	69.3	69.5	66.8	66.8
銀河のしずく	582	3.3	3.7	5.2	10.2	12.7
あきたこまち	551	14.6	14.3	13.5	12.0	10.0
いわてっこ	549	4.9	4.8	4.5	4.3	4.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
北上川上流	572	24.9	25.0	24.7	25.0	25.1
北上川下流	548	68.2	68.3	68.9	68.7	68.6
東部	503	2.4	2.3	2.3	2.2	2.2
北部	517	4.4	4.4	4.1	4.1	4.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量は変化がなく、1㎡当たり全もみ数が0.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.1ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害は、算定期間中での発生はほぼ見られなかった。さらに、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

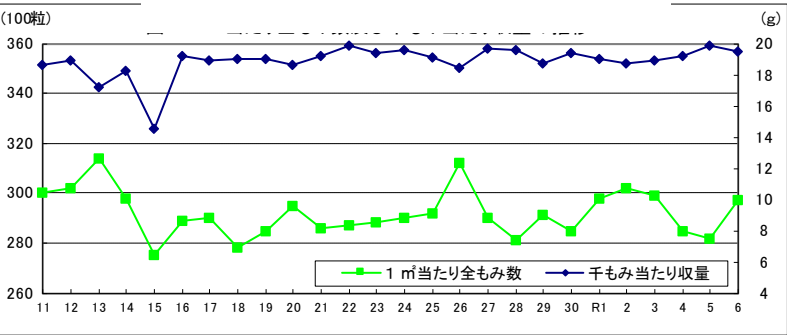
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.4	17.4	17.5	17.4	17.1	17.1	0.0	17.3	94.0	△6.0
1㎡当たり有効穂数(本)	432	450	430	395	390	425	35.0	422	97.7	△2.3
1穂当たりもみ数(粒)	67.7	67.1	69.5	72.2	72.3	69.9	△2.4	69.6	102.8	2.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	290	302	299	285	282	297	15.0	293	100.8	0.8
千もみ当たり収量(g)	19.2	18.7	18.9	19.2	19.9	19.5	△0.4	19.2	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	21.7	21.2	21.6	22.2	22.0	21.9	△0.1	21.8	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	581	585	585	547	582	580	18.0	582	100.1	0.1

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
H30	—	—	101
R1	○	—	103
2	○	×	103
3	○	—	103
4	×	—	99
5	×	◎	104
6	○	○	106

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

宮 城（前回変動:令和6年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

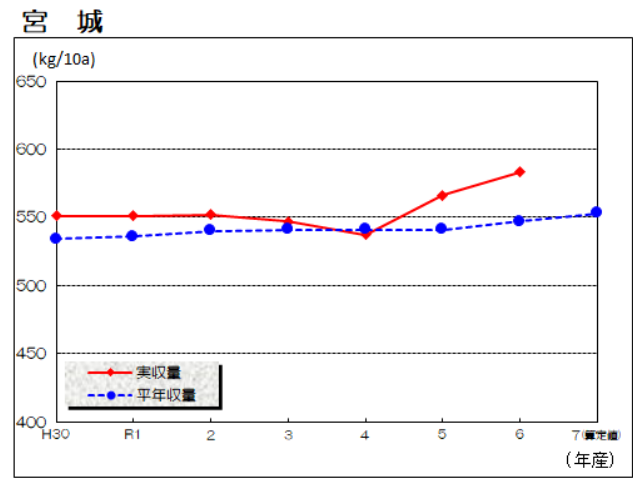
算定結果は553kg（対前年差＋6 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

宮城県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



宮 城	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	551	551	552	547	537	566	583	
7中5平均	553 (6)							
平年収量	534	536	540	541	541	541	547	553
前年差	1	2	4	1	0	0	6	6

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「ササニシキ」、高温耐性品種の「つや姫」が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
ひとめばれ	557	72.6	70.6	70.8	69.8	69.4
つ や 姫	595	7.2	8.3	8.2	8.6	10.4
ササニシキ	584	5.8	6.5	6.4	6.5	7.9
まなむすめ	585	4.9	4.8	5.0	5.3	4.9
萌えみのり	662	1.8	1.8	1.9	1.9	2.2
げんきまる	635	1.5	1.6	1.6	1.8	1.3

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
南部	529	9.9	10.3	10.5	10.3	10.0
中部	537	18.6	18.3	17.7	17.8	18.0
北部	582	59.4	59.5	59.9	60.0	60.4
東部	556	12.1	12.0	11.9	11.9	11.7

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄の推移

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.4ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.4ポイント増加している。

近年の温暖化により「やませ」等低温による被害は、算定期間中での発生はほぼ見られなかった。さらに、気温が高めに推移する傾向にあるため、県内全域において、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

(表3、表4、図2)

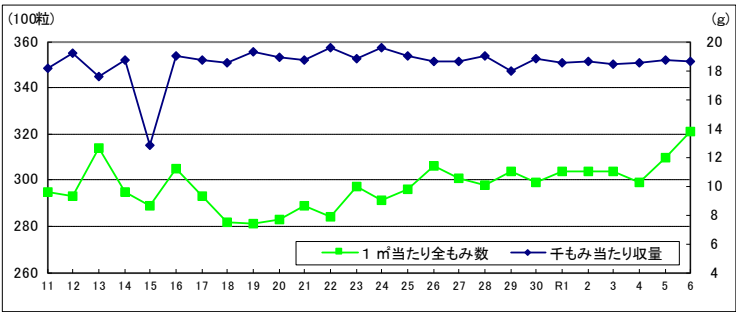
表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.9	17.2	17.0	17.0	16.8	17.0	0.2	16.9	94.4	△5.8
1㎡当たり有効穂数(本)	438	448	437	418	420	454	34.0	440	100.5	0.5
1穂当たりもみ数(粒)	67.2	67.9	69.6	71.5	73.8	70.7	△3.1	69.4	103.3	3.3
1㎡当たり全もみ数(百粒)	291	304	304	299	310	321	11.0	304	104.4	4.4
千もみ当たり収量(g)	19.0	18.6	18.4	18.5	18.7	18.6	△0.1	18.6	97.9	△2.1
玄米千粒重(g)	21.7	20.9	21.4	22.3	21.7	21.8	0.1	21.5	99.1	△0.9
10a当たり玄米重(kg)	558	564	558	552	579	596	17.0	565	101.4	1.4

資料：作物統計

注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
H30	○	－	101
R1	○	×	102
2	○	－	102
3	○	－	101
4	－	－	100
5	○	○	105
6	◎	－	107

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

福 島（前回変動:令和6年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

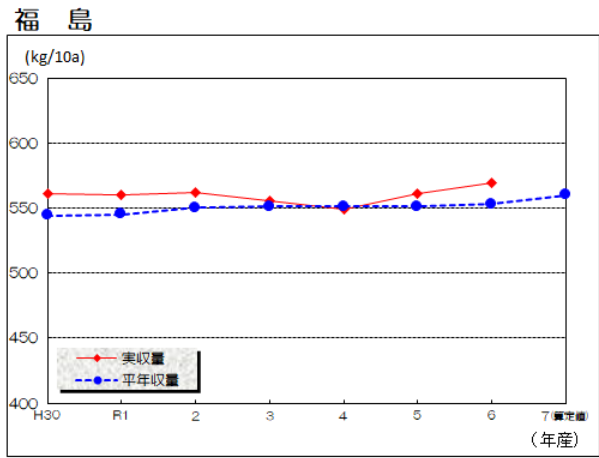
算定結果は560kg（対前年差＋7kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、冷害による極端な減収リスクが低下し、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量水準

福島県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量水準



福島	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	561	560	562	555	549	561	569	
平年収量	544	545	550	551	551	553	553	560
前年差	1	1	5	1	0	0	2	7

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」から収量水準の高い「天のつぶ」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	559	53.5	52.3	53.7	54.1	53.8
ひとめぼれ	593	19.3	18.7	19.7	19.2	18.7
天のつぶ	639	18.8	18.8	18.0	18.3	17.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
中通り	541	54.0	53.8	53.8	53.7	53.5
浜通り	524	11.8	11.7	11.4	11.8	12.3
会津	602	34.3	34.8	35.0	34.7	34.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.1ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が3.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.8ポイント増加している。

また、近年の温暖化により「やませ」等低温による被害は、算定期間中での発生はほぼ見られず、気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量が平年収量を上回って推移している。

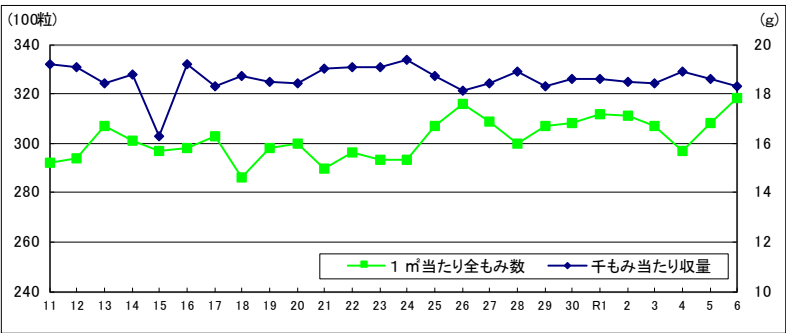
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.7	16.8	16.7	16.6	16.4	16.7	0.3	16.7	94.4	△5.6
1㎡当たり有効穂数(本)	390	404	396	381	388	404	16.0	398	101.9	1.9
1穂当たりもみ数(粒)	76.2	77.0	77.5	78.0	79.4	78.7	△0.7	77.8	102.1	2.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	298	311	307	297	308	318	10.0	309	103.8	3.8
千もみ当たり収量(g)	18.9	18.5	18.4	18.9	18.6	18.3	△0.3	18.5	97.9	△2.1
玄米千粒重(g)	21.9	21.4	21.9	22.0	21.8	21.6	△0.2	21.8	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	563	575	566	561	574	582	8.0	573	101.8	1.8

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終） 指数
H30	○	×	101
R1	○	－	102
2	○	－	102
3	○	×	101
4	－	－	100
5	○	－	102
6	○	×	102

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

茨 城（前回変動:令和5年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

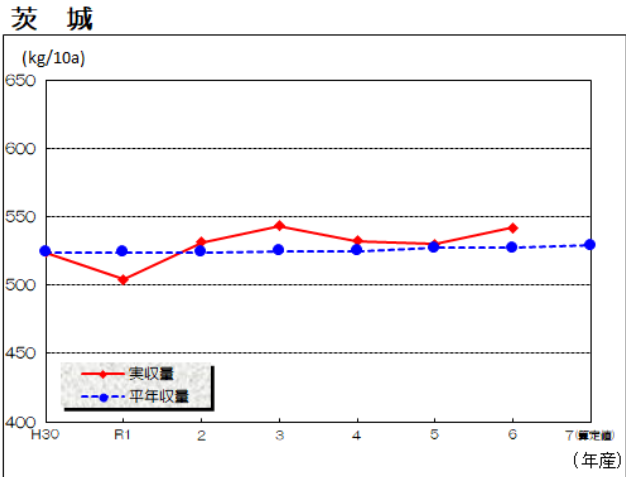
算定結果は529kg（対前年差＋2kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量水準

茨城県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量水準



茨 城	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	524	504	531	543	532	530	542	
	7中5平均 532 (5)							
平年収量	524	524	524	525	525	527	527	529
前年差	0	0	0	1	0	2	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」、「あきたこまち」から、収量水準が高く高温耐性品種の「にじのきらめき」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	534	71.7	69.2	68.3	69.3	67.9
					→ -1.4	
あきたこまち	554	11.6	12.5	11.6	11.3	10.8
					→ -0.7	
あさひの夢	559	2.2	2.4	2.8	2.6	2.5
*マンゲツモチ	491	3.9	2.2	2.2	2.2	2.1
ゆめひたち	531	1.4	2.0	2.1	2.1	1.8
ミルクQueen	524	1.7	2.0	2.3	2.3	2.2
ふくまるSL	566	1.4	1.8	2.0	2.0	2.4
にじのきらめき	622	0.3	0.9	2.0	3.0	5.0
					→ +2.0	
ほしじるし	636	0.8	0.8	1.0	1.0	1.0

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

3 *印はもち米である。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和7年産も収量水準の高い南部・西部地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
北部・鹿行	528	35.8	36.6	37.3	37.2	36.1
南部・西部	533	64.2	63.4	62.7	62.8	63.9

資料：水稲作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.2ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.2ポイント増加している。

近年の温暖化により気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

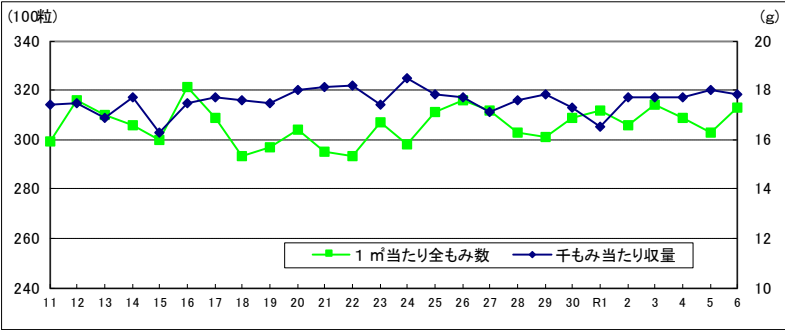
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	16.6	15.7	15.9	15.7	15.5	15.5	0.0	15.7	94.6	△5.4
1㎡当たり有効穂数(本)	380	378	384	384	382	368	6.0	381	100.3	0.3
1穂当たりもみ数(粒)	80.3	81.0	81.8	80.5	83.7	85.1	1.4	81.4	101.4	1.4
1㎡当たり全もみ数(百粒)	303	306	314	309	303	313	10.0	310	102.2	2.2
千もみ当たり収量(g)	18.0	17.7	17.7	17.7	18.0	17.8	△0.2	17.6	97.8	△2.2
玄米千粒重(g)	21.0	20.3	20.6	20.9	20.9	20.8	△0.1	20.6	98.1	△1.9
10a当たり玄米重(kg)	544	543	555	546	544	558	12.0	545	100.2	0.2

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び 千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
H30	○	×	99
R1	○	※	96
2	—	○	103
3	○	○	103
4	—	—	101
5	×	○	101
6	○	○	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

千葉県（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

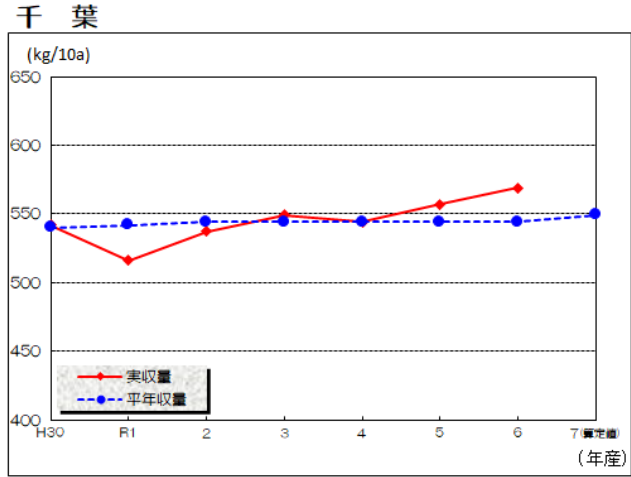
算定結果は549kg（対前年差+ 5 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

(1) 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準

千葉県における近年の10a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）



千葉県	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	542	516	537	549	544	557	569	
7中5年平均				546 (2)				
平年収量	540	542	544	544	544	544	544	549
前年差	2	2	2	0	0	0	0	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」、高温耐性品種の「ふさおとめ」から、同じく高温耐性品種の「ふさこがね」、収量水準の高い「粒すけ」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	530	62.4	59.1	58.1	58.4	58.2
						- 4.2
ふさこがね	597	20.9	21.4	22.2	22.7	22.6
						+1.7
ふさおとめ	559	12.1	11.2	10.3	9.2	8.8
						- 3.3
あきたこまち	559	2.5	2.9	2.9	2.8	2.8
粒すけ	581	1.4	3.0	3.7	4.0	4.5
						+3.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を削いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和7年産も収量水準の高い九十九里地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
京 葉	525	27.2	28.8	27.0	27.0	27.3
九十九里	562	52.4	52.1	51.8	52.1	52.7
南房総	531	20.4	21.1	21.2	20.9	20.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が4.8ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.4ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は0.2ポイント減少している。

近年の温暖化により気温が高めに推移する傾向にあるため、近年の収量水準が平年収量を上回って推移している。

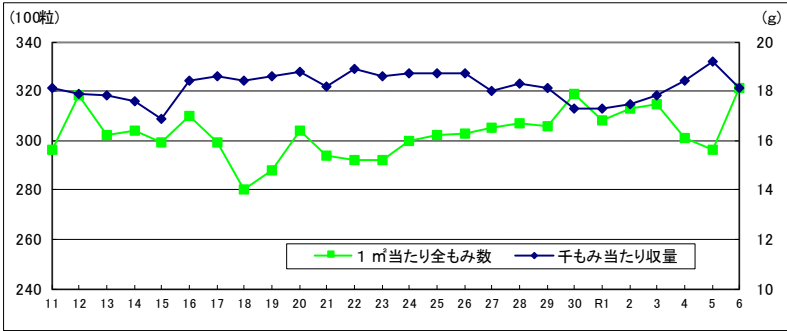
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	16.6	15.9	15.7	15.7	15.4	15.5	0.1	15.7	94.6	△5.4
1㎡当たり有効穂数(本)	380	384	390	383	356	392	36.0	389	102.6	2.6
1穂当たりもみ数(粒)	78.4	81.5	80.8	78.6	83.1	81.8	△1.2	80.6	102.8	2.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	298	313	315	301	296	321	25.0	311	104.4	4.4
千もみ当たり収量(g)	18.7	17.5	17.8	18.4	19.2	18.1	△1.1	17.8	95.2	△4.8
玄米千粒重(g)	21.4	20.8	21.3	21.8	22.0	21.9	△0.1	21.4	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	558	547	561	555	568	581	13.0	557	99.8	△0.2

資料: 作物統計
注: H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び 千もみ当たり収量の推移



資料: 作物統計

表4 最近の作柄(平成30年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
H30	◎	※	99
R1	—	×	95
2	○	×	99
3	○	—	101
4	×	○	100
5	×	◎	103
6	○	○	105

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

山 梨（前回変動:令和6年）

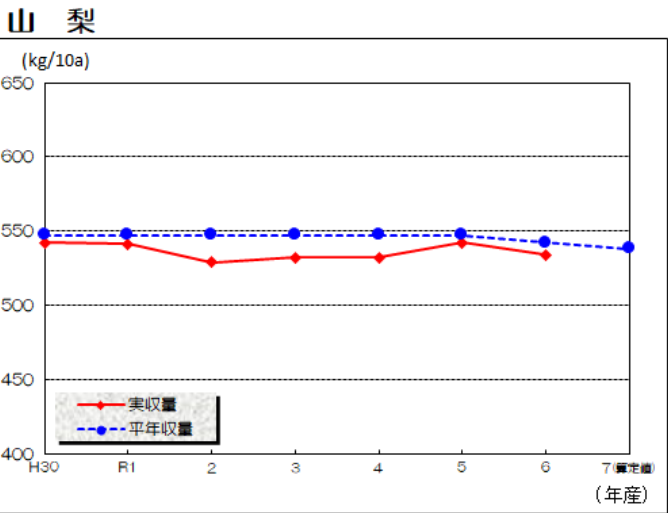
1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

算定結果は538kg（対前年差－4kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量
の水準
山梨県における近年の10 a 当たり収量
については、平年収量を下回って推移し
ている。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



山 梨	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	542	541	529	532	532	542	534	
7中5平均	536 (-6)							
平年収量	547	547	547	547	547	547	542	538
前年差	0	0	0	0	0	0	-5	-4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成の動向
品種構成の動向をみると、収量水準は
高くないものの、良食味でもあり、作期
分散の観点で「ヒノヒカリ」への移行が
増加傾向にあり、平坦地で高温耐性品種
「にじのきらめき」が増加しており、令
和7年産も同様の傾向になるものと考え
られる。
（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	552	65.3	65.2	65.3	65.1	63.3
					→	-1.8
ヒノヒカリ	507	11.5	7.2	13.4	14.0	14.5
					→	+0.5
あさひの夢	511	8.2	4.7	8.1	8.0	7.8
ひとめぼれ	563	4.3	3.5	3.8	3.3	3.2
農林48号	595	2.9	3.4	2.0	2.6	2.3
にじのきらめき	570	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6
					→	+1.6

資料：水稲作況調査結果等
注： 1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

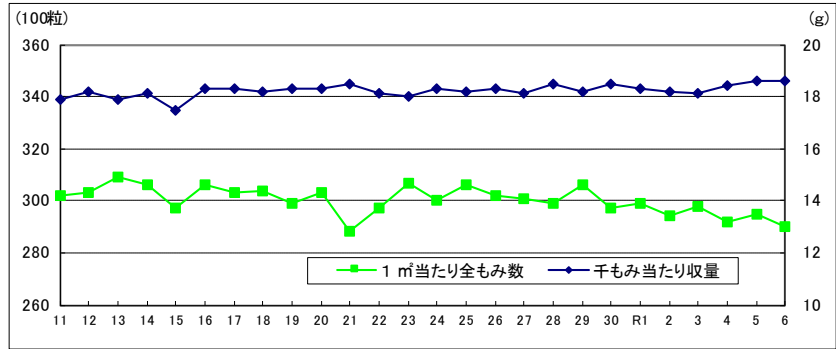
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.1ポイント増加しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.1ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.3ポイント減少している。（表2、表3、図2）

表2 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	17.8	16.6	16.7	17.0	16.8	16.7	△ 0.1	16.7	93.8	△ 6.2
1㎡当たり有効穂数（本）	392	377	379	360	374	364	△ 10.0	374	95.4	△ 4.6
1穂当たりもみ数（粒）	76.3	78.0	78.6	81.1	78.9	79.7	0.8	79.1	103.7	3.7
1㎡当たり全もみ数（百粒）	302	294	298	292	295	290	△ 5.0	295	97.9	△ 2.1
千もみ当たり収量（g）	18.2	18.2	18.1	18.4	18.6	18.8	0.0	18.4	101.1	1.1
玄米千粒重（g）	21.1	20.9	21.4	21.8	21.9	21.3	△ 0.6	21.4	101.4	1.4
10a当たり玄米重（kg）	550	535	538	538	549	540	△ 9.0	542	98.7	△ 1.3

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表3 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作況最終指数）
H30	×	—	99
R1	—	—	99
2	×	—	97
3	—	×	97
4	×	—	97
5	×	○	100
6	×	○	100

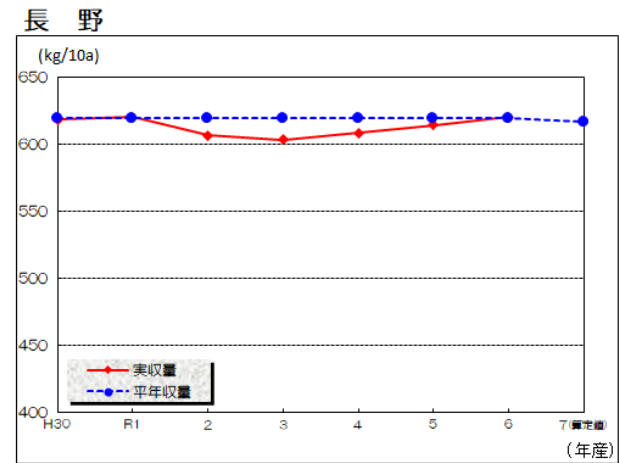
注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

長野（前回変動:平成29年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

算定結果は616kg（対前年差－3kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



長野	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	618	620	606	603	608	614	620	
7中5平均	619 (-6)							
平年収量	619	619	619	619	619	619	619	616
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、大きな変化はみられない。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H29	R2	3	4	5	6
コシヒカリ	626	76.9	76.4	76.4	77.0	76.8	76.4
						-0.5	
あきたこまち	609	10.3	10.0	10.0	10.2	9.7	9.5
						-0.8	
風さやか	667	3.0	5.0	5.7	5.6	5.8	5.7
						+2.7	
美山錦	696	2.0	1.9	1.1	1.0	1.3	1.3
						-0.7	
つきあかり	660	0.0	0.3	0.5	0.6	1.2	1.4
						+1.4	
ひとめぼれ	594	1.1	1.2	0.9	0.7	0.5	0.4
						-0.7	

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
東 信	623	22.0	21.8	22.1	22.3	22.3
南 信	622	26.1	26.2	26.1	26.0	25.9
中 信	628	32.5	32.6	32.5	32.5	32.8
北 信	562	19.4	19.4	19.3	19.2	19.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

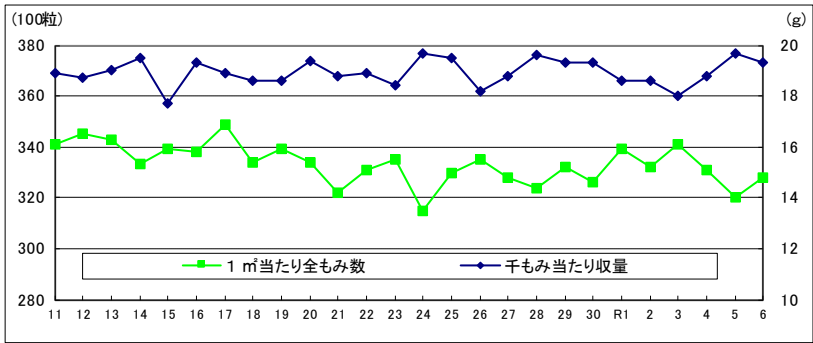
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和 6 年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が0.2ポイント増加している結果、10 a 当たり玄米重は0.3ポイント増加している。
(表 3、表 4、図 2)

表 3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当 たり 株 数 (株)	18.8	17.7	17.5	17.5	17.5	17.5	0.0	17.6	93.6	△ 6.4
1㎡当 たり 有 効 穂 数 (本)	415	400	402	396	387	393	6.0	399	96.2	△ 3.8
1 穂 当 たり も み 数 (粒)	78.9	83.0	84.8	83.6	82.7	83.5	0.8	82.8	104.9	4.9
1㎡当 たり 全 も み 数 (百粒)	330	332	341	331	320	328	8.0	331	100.2	0.2
千もみ 当 たり 収 量 (g)	19.0	18.6	18.0	18.8	19.7	19.3	△ 0.4	18.9	99.5	△ 0.5
玄 米 千 粒 重 (g)	21.7	20.7	22.2	21.9	21.8	21.6	△ 0.2	21.8	100.5	0.5
10 a 当 たり 玄 米 重 (kg)	624	618	615	621	629	633	4.0	626	100.3	0.3

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図 2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表 4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	－	－	100
R1	○	×	100
2	－	×	99
3	○	※	97
4	－	－	98
5	×	○	100
6	－	○	101

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平常並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

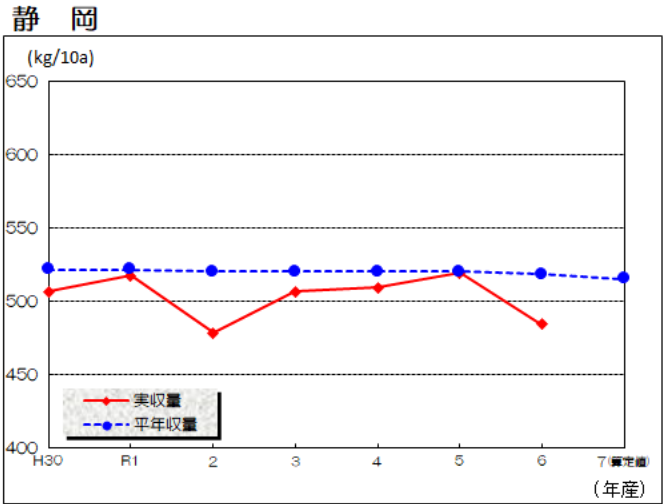
算定結果は515kg（対前年差－3kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

静岡県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）



静岡県	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	506	517	478	506	509	519	484	
7中5平均	504 (-14)							
平年収量	521	521	520	520	520	520	518	515
前年差	0	0	-1	0	0	0	-2	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「あいちのかおりSBL」、高温耐性品種の「にじのきらめき」、収量水準は高くないものの、良食味の「キヌヒカリ」、高温耐性が強く良食味の「にこまる」等でそれぞれ増減が見られる。（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	505	43.4	40.9	42.9	42.0	42.8 → +0.6
あいちのかおりSBL	528	12.3	10.8	9.9	9.4	8.8 → -1.2
きぬむすめ	527	16.5	17.2	18.5	18.2	18.4
キヌヒカリ	504	7.0	6.7	5.5	5.4	3.2 → -2.2
にこまる	518	7.4	7.3	7.3	7.7	8.7 → +1.0
ひとめぼれ	524	3.7	3.5	3.5	3.2	3.2
ヒノヒカリ	447	1.2	1.2	1.2	1.3	1.2
にじのきらめき	584	0.0	0.4	2.4	5.4	5.9 → +0.5
米もち計	469	3.8	3.7	3.3	4.1	4.4

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(3) 収量構成要素と作柄

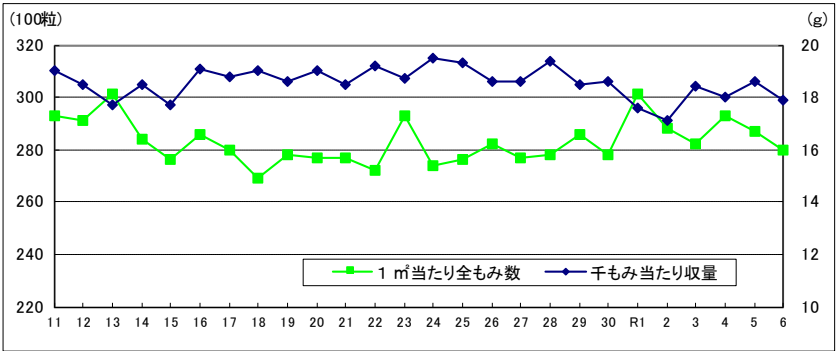
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が3.2ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が4.7ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.6ポイント減少している。
(表2、表3、図2)

表2 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	18.1	17.2	16.9	17.2	17.1	16.8	△0.3	17.1	94.5	△5.5
1㎡当たり有効穂数(本)	371	351	356	362	358	352	△6.0	357	96.3	△3.7
1穂当たりもみ数(粒)	75.1	82.1	79.2	80.9	80.2	79.5	△0.7	80.4	107.1	7.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	277	288	282	293	287	280	△7.0	286	103.2	3.2
千もみ当たり収量(g)	19.0	17.1	18.4	18.0	18.6	17.9	△0.7	18.1	95.3	△4.7
玄米千粒重(g)	22.2	20.8	22.4	22.0	22.1	21.5	△0.6	21.8	98.2	△1.8
10a当たり玄米重(kg)	527	492	518	526	533	501	△32.0	519	98.4	△1.6

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表3 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	－	×	97
R1	◎	※	99
2	○	※	92
3	－	×	97
4	○	×	98
5	－	－	100
6	×	×	95

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

愛 知 （前回変動:令和6年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

算定結果は498kg（対前年差－4kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

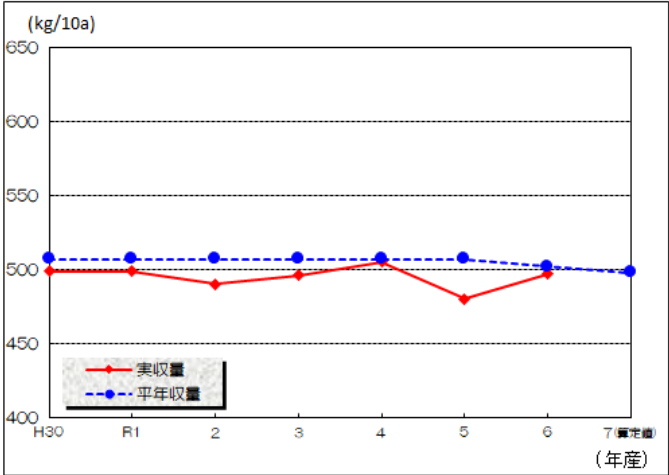
2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量
の水準

愛知県における近年の10 a 当たり
収量については、平年収量を下回っ
て推移している。（図 1）

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

愛 知



愛 知	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	499	499	490	496	505	480	497	
	7中5平均 496 (-6)							
平年収量	507	507	507	507	507	507	502	498
前年差	0	0	0	0	0	0	-5	-4

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「ゆめまつり」から高温耐性品種の「あいちのこころ」への移行が増加している。（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R 2	3	4	5	6
あいちのかおり	499	38.3	40.1	40.5	39.5	39.5
ゴシヒカリ	490	22.1	23.3	24.5	23.4	23.4
ミネアサヒ	494	5.1	5.7	5.9	6.3	6.3
大地の風	509	2.7	2.6	2.5	2.2	2.2
ゆめまつり	515	2.3	2.2	2.1	1.8	1.8
あいちのこころ	495	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
尾 張	490	48.5	47.9	47.8	48.0	48.7
西三河	507	34.1	34.6	34.8	34.7	34.6
東三河	493	17.4	17.5	17.4	17.2	16.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

(3) 収量構成要素と作柄

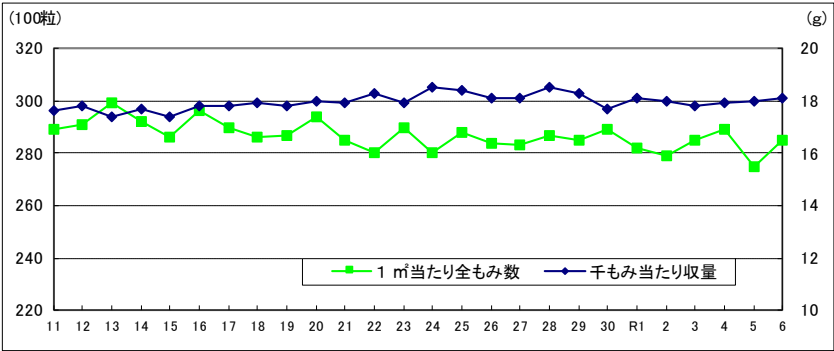
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.5ポイント減少し、千もみ当たり収量も0.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.8ポイント減少している。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.6	16.8	16.9	17.0	16.9	16.7	△0.2	16.9	96.0	△4.0
1㎡当たり有効穂数(本)	381	358	368	379	358	364	6.0	369	96.8	△3.2
1穂当たりもみ数(粒)	75.2	77.9	77.4	76.3	76.8	78.3	1.5	76.9	102.3	2.3
1㎡当たり全もみ数(百粒)	285	279	285	289	275	285	10.0	284	99.5	△0.5
千もみ当たり収量(g)	18.1	18.0	17.8	17.9	18.0	18.1	0.1	18.0	99.4	△0.6
玄米千粒重(g)	22.0	21.7	22.1	22.3	22.9	22.7	△0.2	22.2	100.9	0.9
10a当たり玄米重(kg)	518	502	507	517	496	515	19.0	509	98.2	△1.8

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
H30	○	×	98
R1	—	—	98
2	×	×	96
3	—	×	98
4	—	—	100
5	×	—	96
6	—	—	99

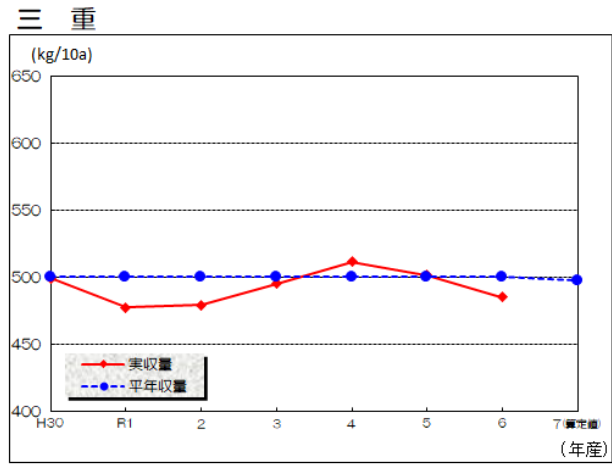
注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

三 重（前回変動:平成19年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

算定結果は497kg（対前年差－3kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



三 重	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	499	477	479	495	511	501	485	
7中5平均	492 (-8)							
平年収量	500	500	500	500	500	500	500	497
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」中心の品種構成となっており、令和7年産も同様に推移するものと見込まれる。（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H19	R2	3	4	5	6
コシヒカリ	498	80.8	73.8	75.9	73.1	71.7	71.7
ギスヒカリ	495	10.4	9.0	9.5	8.4	8.1	8.1
みえのゆめBSL	549	1.5	2.8	2.7	3.2	3.4	3.4
あきたこまち	530	0.0	2.8	2.8	2.0	2.4	2.4
ミルキークイーン	431	0.0	1.8	1.8	1.8	1.8	1.8

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
北勢	483	32.3	32.3	31.8	31.8	32.1
中勢	491	35.3	34.9	35.3	35.5	36.1
南勢	487	15.5	15.7	15.6	15.4	14.6
伊賀	515	16.8	17.0	17.3	17.3	17.2

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

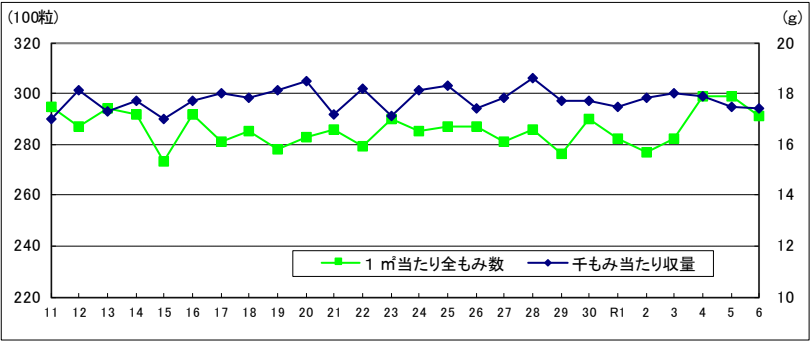
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.1ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が0.6ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は変化なしとなった。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数（株）	17.0	16.1	16.0	16.0	15.9	15.8	△ 0.1	15.9	93.5	△ 6.5
1㎡当たり有効穂数（本）	376	352	359	390	365	373	8.0	368	98.0	△ 2.0
1穂当たりもみ数（粒）	76.1	78.7	78.6	76.7	81.9	78.0	△ 3.9	77.8	102.2	2.2
1㎡当たり全もみ数（百粒）	286	277	282	299	299	291	△ 8.0	289	101.1	1.1
千もみ当たり収量（g）	17.8	17.8	18.0	17.9	17.5	17.4	△ 0.1	17.7	99.4	△ 0.6
玄米千粒重（g）	21.5	21.1	21.7	21.8	21.6	21.1	△ 0.5	21.3	99.1	△ 0.9
10a当たり玄米重（kg）	509	494	507	535	523	506	△ 17.0	509	100.0	△ 0.0

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	○	－	100
R1	－	×	95
2	×	－	96
3	－	－	99
4	○	－	102
5	○	－	101
6	－	－	98

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

兵 庫（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

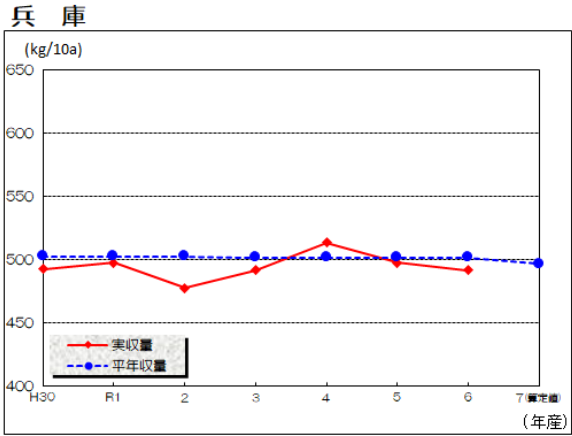
算定結果は496kg（対前年差－5kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準を抑え環境に配慮した栽培が増加傾向であること、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

兵庫県における近年の10 a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図 1）



兵 庫	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	492	497	477	491	513	497	491	
7中5平均				494 (-7)				
平年収量	502	502	502	501	501	501	501	496
前年差	0	0	0	-1	0	0	0	-5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	477	33.9	33.6	36.8	36.8	36.5
ヒノヒカリ	530	20.7	21.6	19.4	18.5	18.6
山田錦	468	14.7	12.1	11.6	13.8	14.5
キヌヒカリ	496	13.7	14.1	13.8	13.1	12.4
きぬむすめ	521	6.6	7.1	6.9	6.6	6.9

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「ヒノヒカリ」、「キヌヒカリ」が減少し、比較すると収量水準が低い「コシヒカリ」、「山田錦」が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。

(表 1)

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和7年産も県南地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
県 南	494	75.9	75.9	75.7	75.8	76.3
県 北	487	15.4	15.5	15.7	15.8	15.7
淡 路	506	8.7	8.6	8.6	8.3	8.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.7ポイント減少し、千もみ当たり収量が0.5ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.0ポイント減少している。

(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	16.6	15.4	15.6	15.6	15.4	15.3	△0.1	15.6	94.0	△6.0
1㎡当たり有効穂数(本)	336	317	330	341	312	312	0.0	326	97.0	△3.0
1穂当たりもみ数(粒)	79.9	83.9	81.8	81.5	83.7	84.3	0.6	82.1	102.8	2.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	269	266	270	278	261	263	2.0	267	99.3	△0.7
千もみ当たり収量(g)	18.9	18.3	18.5	18.8	19.4	19.0	△0.4	18.8	99.5	△0.5
玄米千粒重(g)	21.9	20.9	21.8	22.0	22.2	21.7	△0.5	21.9	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	507	488	499	522	506	501	△5.0	502	99.0	△1.0

資料：作物統計

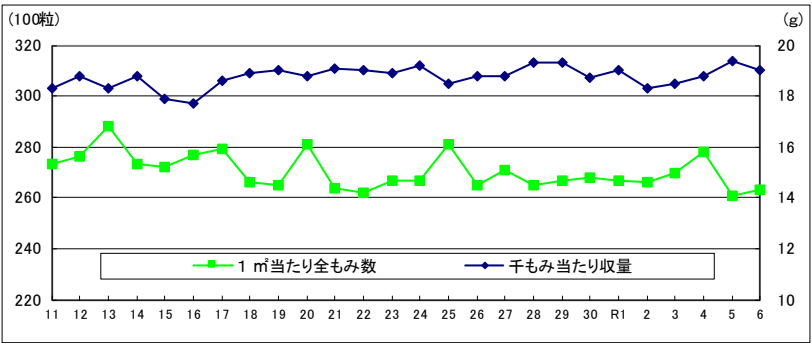
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	－	×	98
R1	－	－	99
2	－	×	95
3	－	×	98
4	○	×	102
5	×	○	100
6	×	－	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

山 口（前回変動:平成20年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

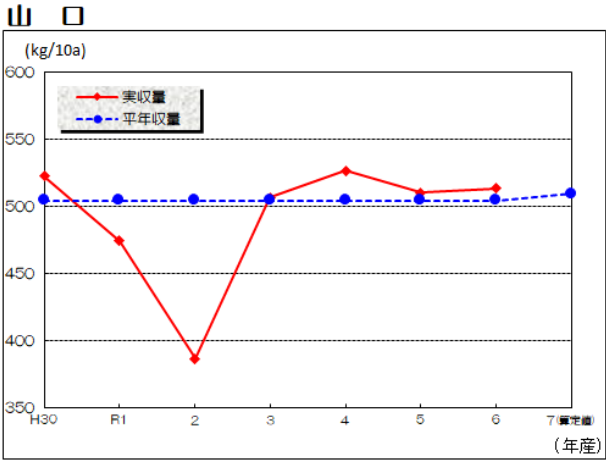
算定結果は509kg（対前年差+ 5 kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

山口県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図 1）



山 口	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	522	474	386	506	526	510	513	
7中5平均	505 (1)							
平年収量	504	504	504	504	504	504	504	509
前年差	0	0	0	0	0	0	0	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」から、高温耐性が強く収量水準の高い「きぬむすめ」、「恋の予感」への移行が増加傾向にあり、令和 7 年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H20	R2	3	4	5	6
コシヒカリ	490	34.5	27.6	27.5	27.7	27.4	25.7
							8.8
ひとめぼれ	496	24.3	21.5	21.7	22.0	21.6	21.2
							3.1
きぬむすめ	537	0.0	12.0	13.4	13.1	14.9	15.6
							+15.6
ヒノヒカリ	488	28.6	20.6	18.4	17.9	16.3	16.3
							12.3
日本晴	528	3.3	3.9	4.0	3.4	3.9	4.0
							+0.7
恋の予感	585	0.0	0.9	2.4	2.6	2.5	2.8
							+2.8
中生新千本	554	0.0	1.8	1.7	1.7	1.7	1.7
							+1.7
晴るる	507	4.0	1.9	1.8	1.7	1.8	1.5
							2.5

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、地帯間差があり、令和 7 年産も収量水準の高い西部地帯の作付面積の割合が引き続き高いことが見込まれる。

（表 2）

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
東 部	480	19.3	19.2	18.9	19.0	19.0
西 部	512	63.7	63.8	64.0	63.9	63.9
長 北	508	17.0	17.0	17.1	17.1	17.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和 6 年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が2.2ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が4.5ポイント増加している結果、10 a 当たり玄米重は2.0ポイント増加している。

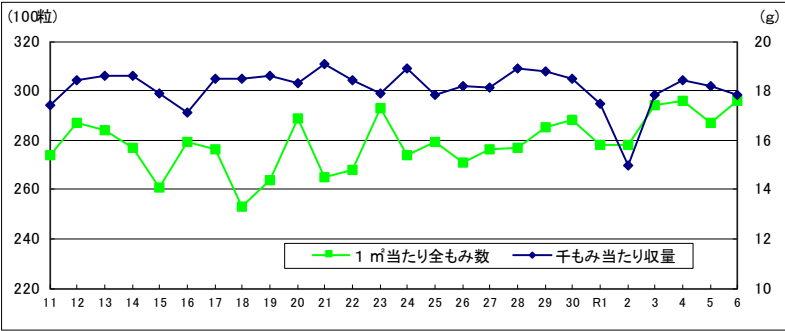
(表 3、表 4、図 2)

表 3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.0	16.3	16.3	16.1	16.1	16.1	0.0	16.2	95.3	△ 4.7
1㎡当たり有効穂数(本)	350	348	361	370	348	355	7.0	359	102.5	2.5
1穂当たりもみ数(粒)	79.1	79.9	81.4	80.0	82.5	83.4	0.9	80.5	101.8	1.8
1㎡当たり全もみ数(百粒)	276	278	294	296	287	296	9.0	289	104.5	4.5
千もみ当たり収量(g)	18.3	15.0	17.8	18.4	18.2	17.8	△ 0.4	17.9	97.8	△ 2.2
玄米千粒重(g)	21.8	20.2	21.8	21.5	21.8	21.7	△ 0.1	21.4	98.2	△ 1.8
10a当たり玄米重(kg)	508	416	522	545	523	527	4.0	518	102.0	2.0

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図 2 1㎡当たり全もみ数及び 千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表 4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指数）
H30	○	－	104
R1	－	×	94
2	－	※	73
3	○	×	101
4	○	－	105
5	－	－	103
6	○	－	103

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

高 知（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

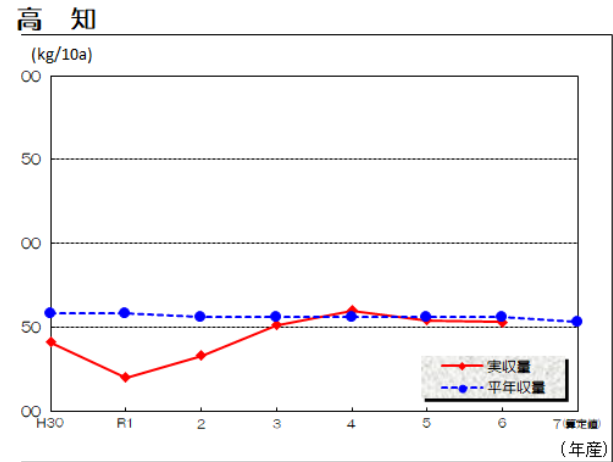
算定結果は453kg（対前年差－3kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

高知県における近年の10 a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図 1）



注：グラフの目盛りの最高収量を600kgとしている。

高 知	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	441	420	433	451	460	454	453	
7中5平均								446 (-10)
平年収量	458	458	456	456	456	456	456	453
前年差	0	0	-2	0	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」から、収量水準は高くないものの、高温耐性が強く良食味の「にこまる」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
コシヒカリ	484	51.3	51.3	51.1	49.9	49.7
						-1.6
ヒノヒカリ	426	29.0	29.0	28.4	28.5	28.4
						-0.6
にこまる	434	5.7	5.7	5.8	7.0	7.0
						+1.3
十和錦	398	2.5	2.5	2.4	2.6	2.5
よさ恋美人	452	1.6	2.2	1.3	1.2	1.0
						-0.6
南国そだち	487	0.6	0.6	0.8	0.8	1.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
中東部	487	59.7	60.0	60.8	61.2	61.7
西部	415	40.3	40.0	39.4	38.8	38.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

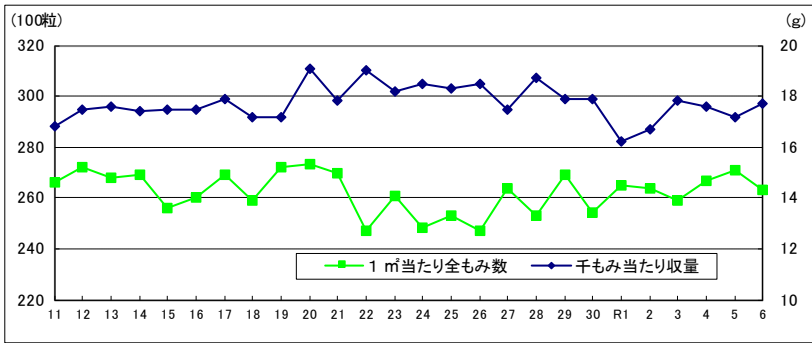
収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が3.0ポイント増加しているものの、千もみ当たり収量が5.9ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は2.5ポイント減少している。
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	15.1	14.3	14.2	14.2	14.2	13.9	△0.3	14.3	94.7	△5.3
1㎡当たり有効穂数(本)	359	353	343	360	360	344	△16.0	353	98.4	△1.6
1穂当たりもみ数(粒)	71.0	74.8	75.5	74.2	75.3	76.5	1.2	74.7	105.2	5.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	256	264	259	267	271	263	△8.0	264	103.0	3.0
千もみ当たり収量(g)	18.5	16.7	17.8	17.6	17.2	17.7	0.5	17.4	94.1	△5.9
玄米千粒重(g)	21.3	21.0	21.6	21.3	21.4	21.1	△0.3	21.2	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	469	442	462	469	466	465	△1.0	458	97.5	△2.5

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	×	×	96
R1	○	※	91
2	○	※	93
3	－	×	98
4	○	×	100
5	○	×	100
6	－	－	100

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

佐 賀（前回変動:平成27年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

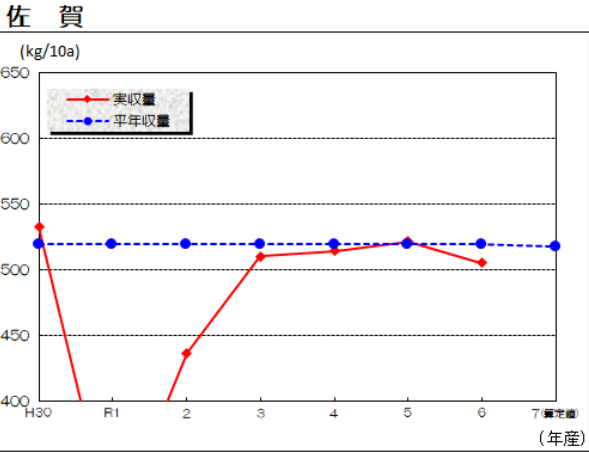
算定結果は517kg（対前年差－2 kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

佐賀県における近年の10 a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図 1）



佐 賀	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	532	298	436	510	514	521	505	
7中5平均	497 (-22)							
平年収量	519	519	519	519	519	519	519	517
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「ヒノヒカリ」から、高温耐性品種の「さがびより」への移行が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H27	R2	3	4	5	6
さがびより	530	19.4	22.7	23.2	26.5	27.8	30.5
夢しずく	473	22.4	26.5	26.7	26.1	25.9	25.1
* ヒヨクモチ	529	22.5	19.4	18.6	19.3	20.2	20.1
ヒノヒカリ	488	21.4	19.7	19.5	18.1	14.8	14.5
コシヒカリ	444	8.0	7.3	7.4	6.9	7.0	8.2
たんぼの夢	526	2.9	2.0	1.8	1.6	1.3	1.1

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 *印はもち米である。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
佐 賀	504	82.0	81.8	81.9	82.2	83.0
松 浦	466	18.0	18.2	18.1	17.8	17.0

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が0.7ポイント減少し、千もみ当たり収量が2.3ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は1.7ポイント減少している。

(表3、表4、図2)

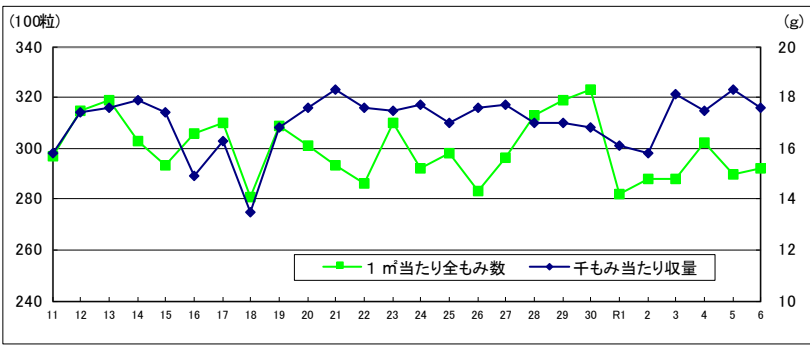
表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.5	16.5	16.4	16.6	16.4	16.3	△0.1	16.5	94.3	△5.7
1㎡当たり有効穂数(本)	400	363	363	365	377	367	10.0	360	95.0	△5.0
1穂当たりもみ数(粒)	73.6	79.3	75.2	78.4	76.9	75.5	△1.4	76.8	104.1	4.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	294	288	288	302	290	292	2.0	292	99.3	△0.7
千もみ当たり収量(g)	17.6	15.8	18.1	17.5	18.3	17.6	△0.7	17.2	97.7	△2.3
玄米千粒重(g)	21.5	21.2	21.6	21.6	21.9	20.9	△1.0	21.4	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	519	454	521	528	532	515	△17.0	510	98.3	△1.7

資料：作物統計

注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
H30	◎	×	102
R1	※	×	58
2	※	※	81
3	※	◎	100
4	×	—	98
5	×	◎	103
6	×	○	99

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
—：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

宮 崎（前回変動:平成28年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

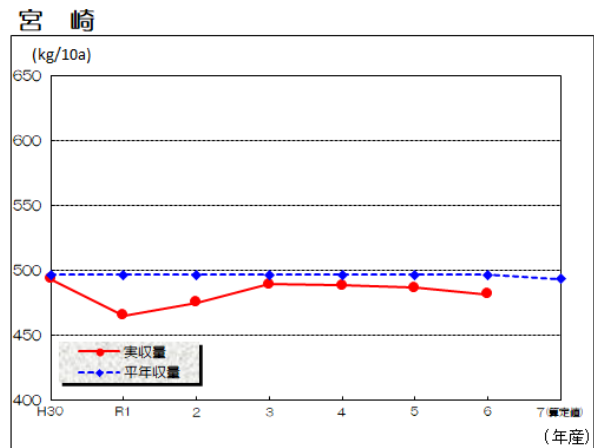
算定結果は493kg（対前年差－3kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10a 当たり収量と平年収量の水準

宮崎県における近年の10a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図 1）



宮 崎	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	493	465	475	489	488	486	481	
7中5平均				484	(-12)			
平年収量	496	496	496	496	496	496	496	493
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、「コシヒカリ」、「まいひかり」が減少し、「ヒノヒカリ」、「み系358」増加が見られる。（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)					
		H28	R2	3	4	5	6
ヒノヒカリ	492	44.8	48.4	49.1	50.1	49.8	50.2
							+5.3
コシヒカリ	488	35.8	34.2	32.5	31.0	30.1	29.7
							-6.1
み系358	552	2.8	4.8	5.5	5.5	6.3	7.1
							+4.3
夏の笑み	663	3.7	2.6	3.2	3.9	3.4	3.3
宮崎52号	498	0.0	1.1	1.1	1.3	2.3	2.6
							+2.6
おてんとそだち	572	2.3	2.0	2.1	1.7	2.3	1.9
まいひかり	519	3.6	1.3	1.2	1.3	1.3	0.9
							-2.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推定した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
広域沿海	469	54.8	54.3	53.8	54.6	52.9
広域霧島	508	37.4	37.7	38.0	36.6	39.1
西北山間	455	8.0	8.0	8.1	8.8	7.9

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和 6 年の平均値を比較すると、1 m²当たり全もみ数が1.7ポイント減少、千もみ当たり収量が1.1ポイント減少している結果、10 a 当たり玄米重は2.7ポイント減少している。

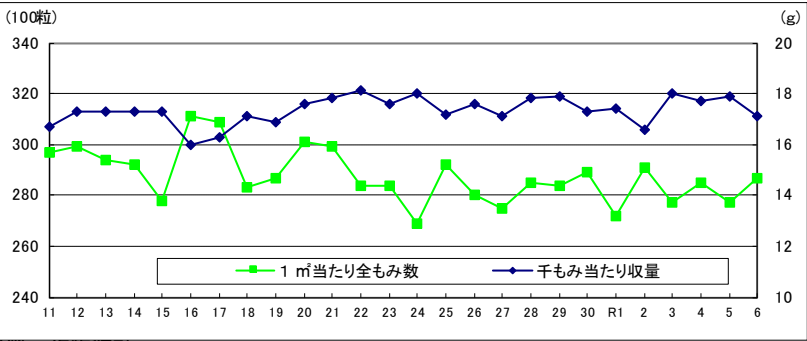
(表3、表4、図2)

表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1 m ² 当 たり 株 数 (株)	17.3	16.3	16.2	16.0	16.1	15.8	△ 0.3	16.2	93.6	△ 6.4
1 m ² 当 たり 有 効 穂 数 (本)	412	378	370	379	385	389	4.0	381	92.4	△ 7.6
1 穂 当 たり も み 数 (粒)	69.4	77.0	74.9	75.2	71.9	73.8	1.9	74.1	106.8	6.8
1 m ² 当 たり 全 も み 数 (百粒)	288	291	277	285	277	287	10.0	283	98.3	△ 1.7
千 も み 当 たり 収 量 (g)	17.7	16.8	18.0	17.7	17.9	17.1	△ 0.8	17.5	98.9	△ 1.1
玄 米 千 粒 重 (g)	21.3	20.9	21.3	21.1	21.1	20.5	△ 0.6	21.0	98.6	△ 1.4
10 a 当 たり 玄 米 重 (kg)	508	484	499	504	497	481	△ 6.0	494	97.3	△ 2.7

資料：作物統計
注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1 m²当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	－	×	100
R1	×	×	94
2	－	※	95
3	×	○	100
4	－	－	98
5	×	○	99
6	－	×	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

鹿児島（前回変動:令和3年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

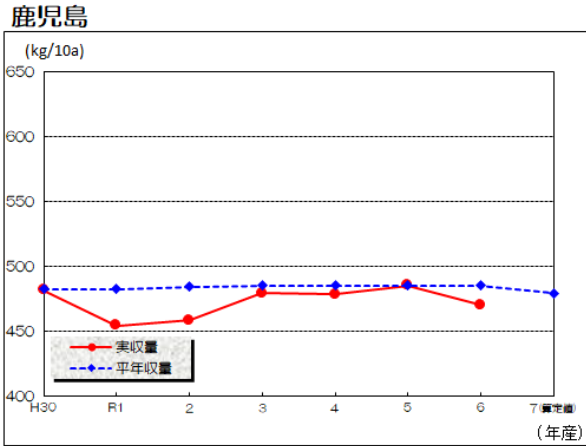
算定結果は479kg（対前年差－6 kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

図 1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

鹿児島県における近年の10 a 当たり収量については平年収量を下回って推移している。（図 1）



鹿児島	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	481	454	458	479	478	485	470	
7中5平均	473 (-12)							
平年収量	482	482	484	485	485	485	485	479
前年差	0	0	2	1	0	0	0	-6

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表 1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、大きな変化はみられない。（表 1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
ヒノヒカリ	480	64.7	65.0	63.5	63.4	63.5
コシヒカリ	432	14.3	14.4	14.2	14.1	14.2
あきほなみ	524	7.6	9.3	9.4	9.6	9.6
イクヒカリ	515	6.0	5.7	5.5	5.4	5.4
なつほのか	530	2.4	3.2	3.5	3.6	3.6

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の資料から推定した。

表 2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		R2	3	4	5	6
薩摩半島	448	17.7	18.2	18.1	17.9	17.8
出水薩摩	487	26.5	25.9	26.0	26.6	26.8
伊佐始良	485	28.3	28.0	28.0	28.5	28.9
大隅半島	470	23.5	23.9	23.9	23.1	22.6
熊毛・大島	408	4.0	4.0	4.0	3.9	3.8

資料：水稲作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表 2）

(3) 収量構成要素と作柄

収量構成要素については、平成20年から26年の平均値と平成30年から令和6年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が2.5ポイント減少し、千もみ当たり収量は変化がなかった結果、10a当たり玄米重は3.1ポイント減少している。
(表3、表4、図2)

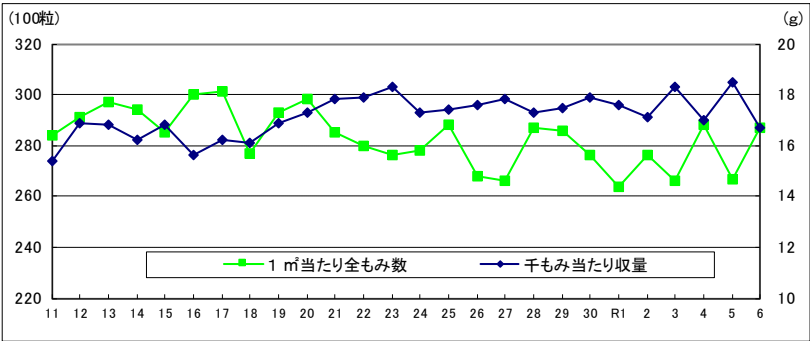
表3 収量構成要素

	H20～H26年 平均値 ①	令和2年	3	4	5	6	対前年差	H30～R6年 平均値 ②	③＝ ②／①	ポイント差
1㎡当たり株数(株)	17.9	17.4	17.7	17.3	17.4	17.3	△0.1	17.4	97.2	△2.8
1㎡当たり有効穂数(本)	388	352	375	378	358	377	19.0	369	95.1	△4.9
1穂当たりもみ数(粒)	72.1	78.4	70.9	76.2	74.6	76.1	1.5	74.8	103.7	3.7
1㎡当たり全もみ数(百粒)	281	276	266	288	267	287	20.0	274	97.5	△2.5
千もみ当たり収量(g)	17.6	17.1	18.3	17.0	18.5	16.7	△1.8	17.6	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	21.5	21.1	21.2	21.0	21.7	20.9	△0.8	21.2	98.6	△1.4
10a当たり玄米重(kg)	499	471	486	490	495	478	△17.0	484	96.9	△3.1

資料：作物統計

注：H20～H26年平均値及びH30～R6年平均値は、7中5平均値である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：作物統計

表4 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全もみ数	登熟	（作最況終指）数
H30	－	－	100
R1	※	－	94
2	×	×	94
3	※	○	100
4	○	×	98
5	×	◎	101
6	－	※	97

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

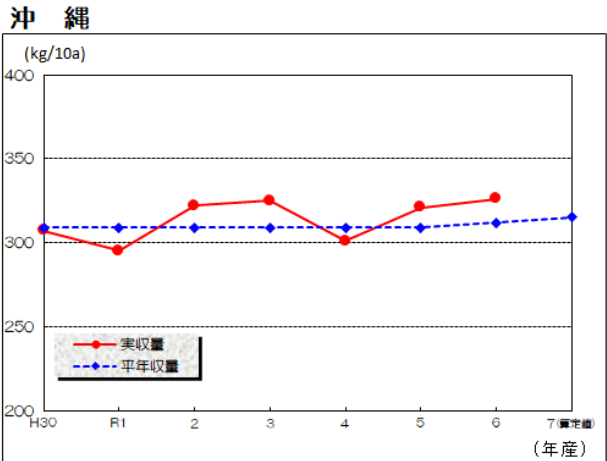
算定結果は315kg（対前年差＋3kg）となった。
 これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していることによるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準

沖縄県における近年の10 a 当たり収量については、平年収量を上回って推移しつつある。（図1）

図1 近年の10 a 当たり収量と平年収量の水準



沖縄	H30	R1	2	3	4	5	6	7(算定値)
実収量	307	295	322	325	301	321	326	
7中5平均				315 (3)				
平年収量	309	309	309	309	309	309	312	315
前年差	0	0	0	0	0	0	3	3

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表1 品種別作付面積割合の動向

(2) 品種構成及び作期別の動向

品種構成の動向をみると、「ミルキーサマー」が減少し、収量水準の高い「ちゅらひかり」、「夢十色」が増加傾向にあり、令和7年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり収量 水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
ひとめぼれ	385	80.5	75.1	74.9	75.1	75.1
ちゅらひかり	404	11.8	13.3	15.3	11.2	12.3
ミルキーサマー	272	3.0	5.4	3.4	4.9	3.9
北陸193号	445	1.4	3.9	4.4	3.7	4.0
夢十色	404	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、収量水準の高い沖縄諸島の作付面積割合が増加している。（表2）

表2 作柄地帯別作付面積割合の動向

作期	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合（％）				
		R2	3	4	5	6
沖縄諸島	333	31.8	34.1	35.2	34.2	34.9
八重山	308	68.2	65.9	64.8	65.8	65.1

資料：水稻作況調査結果等
 注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
 2 作付面積割合は作物統計の作付面積から算出した。

表 3 最近の作柄（平成30年産以降）

年次	全 も み 数	登 熟	（作 況 最 終 指 数
H30	…	…	99
R1	…	…	95
2	…	…	104
3	…	…	105
4	…	…	97
5	…	…	104
6	…	…	105

注：◎：良（多い）、○：やや良（やや多い）、
－：平年並み、×：やや不良（やや少ない）、
※：不良（少ない）

沖縄県については、水稻作況標本筆を設置していないことから「…」で示した。